論文内容の要約

学生番号	3218001	指導教員確認		主　査	佐藤　まゆみ
氏　　名	阿部　美香			副　査	伊藤　龍子
				副　査	上野　恭子

学位論文名	集中治療室でせん妄状態の患者が安心できるケア方法の開発 - 患者の経験を基盤とした評価 -
訳タイトル	Development of a care method in which patients with delirium in intensive care unit can feel safe: Evaluation based on patients' experience
共　著　者	

論文内容の要約（1,000 字～1,500 字）

【目的】
集中治療室（Intensive care unit; ICU 以下、ICU）でせん妄状態の患者（以下、患者）は、精神的危機に直面していると考えられる。そこで、患者の経験を基に、ICU で患者が安心できる看護師の関わり方を開発した。

【方法】
患者の経験を参考に看護師の関わり方を考案するため、研究を二段階構造で実施した。第 1 研究では、せん妄から回復した患者を対象に非構造化インタビューを実施し、現象学的研究の手法で分析して、患者がせん妄を発症していた時の経験を明らかにした。第 2 研究では、患者の経験への対応に適した理論を選択し、ICU 看護師（以下、看護師）が実践可能な方法に適用させた介入ケアを考案し、対照群のある中断時系列デザインを用いた準実験研究によって患者の経験の変化を確認した。

【結果】
第 1 研究の結果、患者は、情報を誤って認知することにより気掛かりが生じ、それを周囲の人に伝えようとしていた。しかし、伝わらないと判断して身の危険を感じ、恐怖を抱くに至っていた。そこで、患者が身の危険を感じて恐怖に陥らずに済む、すなわち安心できる方法として、第 2 研究では、人が相互交流において直観的に安全と感じる時の神経生物学的反応と相互交流のポイントを提唱したポリヴェーガル理論を基盤に介入ケアを考案した。介入ケアは、看護をする際の患者への接し方を規定し、⑴患者の顔の正面から視線を合わせる、⑵こちらからの指示をする前に患者の体験や要望を尋ねる、⑶話し声は抑揚をつけて柔らかくはっきりとし、⑷身体に触れる場合は⑴～⑶をしてから、⑸せん妄患者の経験の意味を知った上で関わる、の 5 点を実践するものとした。結果、介入群 3 名のうち 1 名はせん妄、2 名は閾値下せん妄であった。3 名とも、せん妄の症状がいくつか出現していた中でも安心できた出来事として、苦しみが生じている時に看護師が苦しみを理解して対応してくれた経験を語った。看護師は、介入ケアを実践したことを契機に患者の表情に気付き、感情を推測するようになるという自身の変化を自覚するとともに、患者が穏やかに過ごせた時間があったと評価した。

【考察】
第 1 研究の結果、患者はせん妄状態下にあっても周囲に人の存在を認識し、その人との相互作用を求めていた。しかし、その人が医療者であるという認識は曖昧であり、相互作用もうまく機能せずに危機に陥っていると考えられた。そこで第 2 研究において、患者が直観的に安全を感じられるように看護師の関わり方を工夫する介入ケアを実施したところ、介入群の患者は看護師を明瞭に認識し、看護師との相互作用によって安心できた経験をした。このことは、介入ケアを実践した看護師が患者の社会的支持となり、患者の経験に影響を与えたと考えられた。

【結論】
介入群の患者は、看護師との相互作用により安心する瞬間を経験した。これにより、看護師が介入ケアを実践することで、患者は精神的危機を回避できる可能性が示唆された。